

Title	1 2 : 下顎機能運動路と咬合平面の傾斜との関連について
Author(s)	池田, 一洋; 山下, 秀一郎
Journal	歯科学報, 118(3): 243-243
URL	http://hdl.handle.net/10130/4627
Right	
Description	

No.11：歯科医院選択時に重視する要因と転院回数の検討

小野瀬祐紀¹⁾，鈴木誠太郎¹⁾，石塚洋一¹⁾，佐藤涼一¹⁾，江口貴子¹⁾²⁾，上條英之³⁾，杉原直樹¹⁾
 (東歯大・衛生)¹⁾ (東歯大・短大)²⁾ (東歯大・歯科社会保障)³⁾

目的：複数回の転院は、かかりつけ歯科医機能を構成する要素の一つである継続性を阻む障壁となっていることが考えられる。本研究は、歯科医院を複数回転院した経験のある者が、歯科医院の選択時に重視している内容に注目し、転院に至る経緯の一端を把握することを目的とした。

方法：2018年2月に静岡県富士宮市で開催したスポーツ大会及びスポーツクラブの参加者のうち同意を得られた130名に対し質問紙調査を実施し、113名より有効回答を得た。質問紙調査の内容は歯科医療に対する意識についての項目とした。解析方法はコレスポネン分析及びロジスティック回帰分析を用いた。

結果：被検者は10～70歳代の男性77名、女性36名であった。引越し以外の理由での転院回数別では、転院経験なし36名(31.9%)、1回25名(22.1%)、2回25名(22.1%)、3回16名(14.2%)、4回以上11名(9.7%)であった。歯科医院を選択する上で重要視している内容(複数回答形式)は「丁寧に診てくれる」(66.4%)が最も多く、「通院に便利」(61.9%)、「歯科医師が信頼できる」(51.3%)と続いた。コレスポネン分析の結果、転院回数と歯

科医院を選択する上で重視する内容の関係では、転院経験なしの者の近くに「通院に便利である」が位置していた。また「丁寧に診てくれる」、「歯科医師が信頼できる」「歯科医師の対応や人柄が良い」は原点近くに位置し、転院回数と関連が低かった。4回以上の転院を経験している者の周辺には「歯科医師の治療方針に満足できる」「治療費についてわかりやすく説明してくれる」「ホームページで事前に情報を確認できる」が位置していた。性別、年齢、通院における自動車の利用で調整したうえで、転院回数4回以上の者を目的変数としたstepwise法を用いた多重ロジスティック回帰分析の結果、「治療費についてわかりやすく説明してくれる」(OR: 8.69)のみで有意差を認めた(P<0.05)。

考察：歯科医院の選択において、コレスポネン分析から、転院回数に関係なく、歯科医師の人間性や丁寧に診療に関連する内容を重視していた可能性はある。また、複数回の転院経験者は重視している内容が異なることが推察された。ロジスティック回帰分析より、複数回の転院経験者は、治療費のわかりやすい説明をしてくれる点に注目していることが示唆された。

No.12：下顎機能運動路と咬合平面の傾斜との関連について

池田一洋，山下秀一郎(東歯大・パーシャルデンチャー補綴)

目的：現在、補綴装置の製作における仮想咬合平面の決定には、形態学的指標の一つであるカンベル平面を用いることが多い。しかし、天然歯列における咬合平面の傾斜はカンベル平面と平行とは限らず、形態学的指標のみを基準に用いることは顎機能に問題が生じることが考えられる。よって、仮想咬合平面を決定する際には形態学的指標だけではなく、咀嚼運動やタッピング運動などの機能的因子も基準にすることが望ましいと考えられる。本研究では、機能運動と咬合平面の傾斜との関連を調べることを目的とした。

方法：被験者は計6名(男性4名女性2名)とした。6自由度顎運動測定装置を用い、被験運動として咀嚼運動とタッピング運動を選択した。基準平面は被験者固有の上顎咬合平面に設定した。計測歯は咀嚼側の下顎第一大臼歯と下顎中切歯とした。計測地点は、第一大臼歯において咀嚼運動では咬頭嵌合位の地点から直下5.0mm, 4.0mm, 3.0mm, 2.0mm, 1.0mm, 0.5mmの6地点、タッピング運動では同様に直下1.5mm, 1.0mm, 0.5mmの3地点とし、それぞれ計測地点において第一大臼歯と中切歯の座

標を記録した。分析では、各計測地点と咬頭嵌合位とを結んだ直線と基準平面とのなす角度を計測し、その角度を閉口角とした。咀嚼運動の閉口角とタッピング運動の閉口角とをピアソンの相関係数の検定を用いて統計分析を行った。

結果および考察：咀嚼運動では第一大臼歯部、切歯部とも閉口角は5.0mm地点から0.5mm地点に向かって減少する傾向が認められた。また、第一大臼歯部閉口角は5mm地点において最も分布の幅が狭く、中央値は71.5度となった。タッピング運動では第一大臼歯部、切歯部とも閉口角は1.5mm地点から0.5mm地点に向かって増加する傾向が認められた。また、切歯部閉口角では1.5mm地点において最も分布の幅が狭く、中央値は73.0度となった。咀嚼運動第一大臼歯部の5.0mm地点の閉口角とタッピング運動切歯部の1.5mm地点の閉口角との間に有意な相関係数が認められた(r=0.65)。したがって、仮想咬合平面の設定には第一大臼歯部咀嚼運動路で5.0mm地点の閉口角を参考に設定することで、固有の咬合平面を再現でき、また、タッピング運動が咀嚼運動の代用となることが併せて示唆された。